八犬傳いぬのさゝし　四十二　上冊

種彦孫 柳亭

犬傳犬迺草紙

柳亭種彦 著

或田舍の手習師匠筆塚などゝ名聞こゝて其父の墓邊
に建て用の筆もそこに潮ちる者兎角て顧ぬ恩を知らぬ
畜生ニと一番親を言ふ〜こゝ此先生筆の流を第べ〜先祖の法
ハ左ぐりつゝ〜踊よ遺る扇子手巾こゝ五ハ必為ふ〜ふせど大人金形らば
に顧て暑猛せぬ赤ゝ〜書藤黄を施て病者と扱〜
その人ハそのゝ人ゝ神妙を彫ひ無辜民を屠戮ふ疫神より
も懼る〜羞小善ハ者〜鳥大惡も赤牡〜世ゝ彼村翁
宛那時ハ狡兎死〜ゝ走狗亨らるゝ犯象蟲が語を引〜と欲大の壁言
の縁ハ有ぬ〜ゝ大きゝ世話とやゝも序文のあ〜ゝ望るゝこゝ

万延 屠維協洽鶉尾下澣

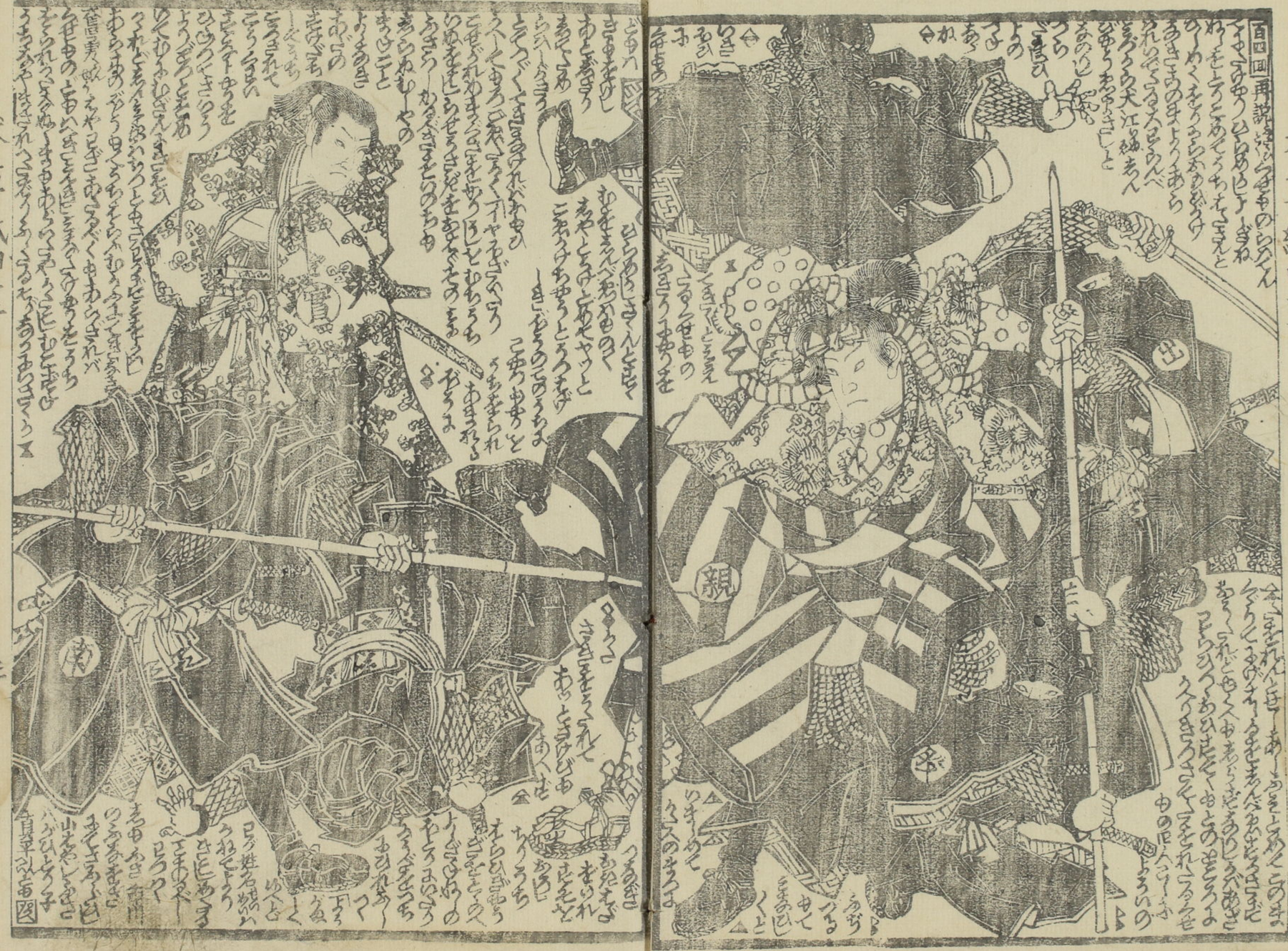
柳亭種彦

濱路姫病牀ハ
怨鬼ヲ厭ル

里見義成北方
吾嬬前

此更の
解ハ
大
よ

下快
記
べし



梓醫
せきうて
毒藥と
此次の重の
巻

柳亭録

本家
實母散

松方實母さんの義八中そう一有くすり問屋一丁目西ゑ
うて年末賣弘メ者いい所店をひろ者代金貳朱
向東ゑゑ引うりかいるふ母勢四日向年賀よい
さんぜんさんぜんちのうち一切の妙薬
中橋南傳馬町一丁目東ゑ
丁藍堂孝輔製

厚化粧萬年嶋田

五篇より　爲永春水作
九編よりで　梅蝶樓國貞画

柳蔭月朝妻

初篇より　山々亭有人作
追々出板　梅蝶樓國貞画
午春　秋

這の一蝶が名ゝ朝妻柳の唱歌よめとぐき彼の呂利義教さたろう堅固の性うるを廣澤子太郎とゝいくるもの女色を以て心迷ひ一時出頭ろくゝりも賀屯英智の勝元と智を鞍ゝの長譚其他祈願所真海ゞ身を亡ぶもの話ゝ多けるべし

作合初編より御高説のゆゑ伏ち年寿い